



令和7(2025)年度
山陽中学校だより(こうき)
令和8年2月2日(月)
第10号 文責 三浦 洋



「2年生 姫路班別学習」

2年生は1月29日(木)に班別学習で姫路城周辺の史跡や施設を見学しました。私は、姫路城正面の内堀からの入口である桜門に入った所で本校のいくつかの班の2年生を出迎えることができました。

世界遺産を示す石碑は、現地に一か所だけ設置することが許されています。その「世界遺産 姫路城」と彫られた石碑の前で記念撮影をした後、昔の桜門の建造物の様子や、現在の「ぼたん園」がある三の丸の高台に「御居城(ごきょじょう)」が建ち、(天守閣ではなく)そこで藩主や家臣が生活をしていたことを説明しました。

私が、ほんのわずかですが、このように姫路城の話ができたのは、姫路城のことを調べておられる方々からフィールドワークの際に教えていただいたからです。なぜ、姫路城についてもっと知りたい、と思ったのかは、次のような理由からです。

前回の中学校教科書改訂で、英語の教科書に日本文化を紹介する内容が記載されています。10年ほど前になりますが、なぜこのような内容が掲載されるようになったのか、その経緯を聞き、納得した覚えがあります。

日本人が外国に行き、食事会などで外国人とコミュニケーションをとる場面で、外国の方は、自国や自分の故郷のことについて、たいへん物知りでじょうずに説明できるのに対し、日本人はあまり自國のことを知っておらず、じゅうぶんな説明ができない、と。欧米では、自分の住んでいるまちや自國の文化について、他者と会話ができるようなレベルまで学ぶことが求められるそうです。学校の授業でその国の文化や歴史について学び、教養を身に付けることが大切である、という考え方方が根付いているのでしょうか。英語の教科書に日本の文化についての説明が掲載されるようになったのは、日本の中学生に少しでも日本の文化について関心をもってもらい、身に付けた教養を英語で説明できるようになってもらいたい、との意図があったようです。

私は、ほんの6年前までは姫路城内の史跡について、よく知りえていませんでした。この英語の教科書の話を耳にし、自分も他者に説明できるような教養を身につけられていない、と反省した次第です。このような理由で自分の居住地のシンボルであり愛着のある姫路城についてもっと知りたい、と思うようになりました。たまたま姫路城のすぐそばにある学校で勤務していましたので、そこでの同僚や専門家の方々から教えていただける機会に恵まれました。何度かフィールドワークに参加して学んだ知識の受け売りですが、少しだけでもこの機会に説明できてよかったです。

今回の姫路班別学習は、大きく2つの目的があります。1つ目は、修学旅行を前にひかえ、主体的に責任をもって班で活動すること。2つ目は、3年生まで続く探究学習の一環として、自分の住んでいるまちをよりよくするために、どのように地域社会と関わっていくかを探究すること。

1つ目の目的に対しては、実行委員を中心とし、寒いなかにもかかわらず班員とよく協力しながら学習できていました。まだまだ改善の余地はありますが、3年生4月の修学旅行では、新たな学級での仲間と力を合わせ、主体的に活動するなかで最上級生の名にふさわしい仲間づくりをしてほしい、と願います。

2つ目の目的は、この姫路班別学習を手始めとし、修学旅行での学習も含め、その後も続く探究学習の取組によって達成されます。「住むほどに好きが深まる姫のまち」のキャッチフレーズは、最終選考で私たち姫路市民の投票によって選出されたものです。そのようなまちにするためには、ここに住んでいる私たち自身の取組が不可欠です。3年生で実施する探究学習のなかで、2年生の皆さんが姫路のまちをよくするためにどのような納得解を導くか、楽しみにしています。

今回の班別学習のなかで、姫路を訪れている観光客の方々に姫路のまちの魅力についてインタビューアー調査をする、という課題が課されていました。日本語の通じない外国からの旅行者に対し、中学2年生レベルの英語をもとに、勇気をふりしぶって奮闘している2年生の姿が印象的で、頼もしかったです。

2年生の皆さんなら姫路のまちがさらに好きになるように力を発揮してくれる、と期待します。そして、将来にわたり自分の住んでいる地域社会に貢献する人として、在りたい自分を確立してほしい、と心より願っています。